

首都大学東京都市教養学部人文・社会系
東京都立大学人文学部
「人文学報」第398号
(日本語教育学)
2008年3月抜刷

C.J.スミスの言語変化タイポロジーからみた
日本の地域語におけるアスペクト形式

ダニエル・ロング

梁井久江

C.J.スミスの言語変化タイポロジーからみた 日本の地域語におけるアスペクト形式

ダニエル・ロング
梁井 久江

1. 言語変化現象の一般化

言語変化現象には言語を超えた類似性が見られるか。その一般化はどこまで認められるか。また、その種類のタイポロジーが可能か。こうした課題は言語変化を科学的に捉えようとする言語学者にとって重要な課題である。

本稿では、イギリス人の言語学者C. J. スミス (Smith 2002) が提唱している一つのタイポロジーを紹介し、これが日本語のアスペクト表現のバリエーションを考える際に有効であるかどうかを検討する。そして、このタイポロジーが西日本で起きている変化を説明するために役立つものであると結論づける。なお、本稿で紹介しているロマンス語族およびオーストロネシア語族の言語変化の例は全てSmith (2002) に基づいているが、スミスの資料は箇条書きとなっている配布物であり、本稿の解説はスミスを訳したものと言うより、口頭発表の説明をロングが日本語で書いたものである。

2. C.J.スミスの言語変化タイポロジー ラテン語

Smith (2002) は、言語変化の一つの現象の類型論を試みている。それは、すなわち、ある言語形式が不要となったときに、どのような現象が起きるかというものである。以下、ラテン語の例を取り上げ、あらゆる可能性を探りたい。

まず、タイプAは、異なる二つの言語形式が祖語の場合から文法的意味・機能を変えず残っているものである。例えば、ラテン語の対格MEと与格MIHI (後にMIに変化したもの) がラテン語から発展したルーマニア語では、音声学

的变化を起こしている ([me]から[mã]) ものの、文法的機能がそのまま受け継がれている。

タイプ A (現状維持。両方の語形が役割の違うままで残る)

ラテン語		ルーマニア語
対格 ¹	ME >	<i>mã</i> 対格の接続代名詞 ²
与格 ³	MIHI > MI >	<i>mi</i> 与格の接続代名詞

タイプ B 1 と B 2 は、片方の形式が消失し、残った語形が両方の意味(文法的機能)を担うようになるパターンである。フランス語では、対格と与格の区別がなくなっており、かつてのラテン語で対格のみを表していた ME が両方の意味を担っている。このように対格が生き残るパターンを B 1 とする。なお、両方が与格に統一される変化パターンも理論的にはあり得るはずなので、これを B 2 とする。しかし、言語的バラエティに富んでいるロマンス諸語でも、これにあたる言語変種(方言)はいくら探しても見当たらない。

タイプ B 1 (片方の語形消失。区別が失われ、片方の語形が消える。)

ラテン語		フランス語, トスカナ方言=標準イタリア語
対格	ME >	<i>me</i> 対格と与格の接続代名詞。 (なお, <i>moi</i> は離接代名詞 ⁴)

与格	MIHI > MI >	---
----	-------------	-----

タイプ B 2 (片方の語形消失。区別が失われ、もう片方の語形が消える。)

ラテン語	報告されていない
------	----------

1 対格 (accusative) 他動詞の直接目的語。例:「彼を殴った」

2 接続代名詞 (conjunctive pronoun), clitic

3 与格 (dative) 間接目的語。例:「彼に渡した」

4 離接代名詞 (disjunctive pronoun) 動詞の前に来ない。

対格 ME > ---
 与格 MIHI > MI > mi (何らかの機能で残っている)

このように、理論的に考えられる言語変化パターンでも、それが実際には起こっていないこと、つまり、起こりやすい言語変化と起こりにくい言語変化が見られることはスミスの強調している点である。スミスはまた、複数の言語においても、こうした傾向が見られることを指摘し、この原因をめぐって考察を行っている。こうした原因の解明について、はっきりした結論に至っているわけではないものの、言語を超えた類似性が見られること、つまり、言語変化には一種のタイポロジーが可能かもしれない、という主張だけでも、スミスの研究は十分興味深いことであると思われる。なお、このタイポロジーが日本語の方言変化にも応用できることは今回の執筆者がのちほど主張することだが、まずその前にスミスのタイポロジーをさらに説明しよう。

タイプCでは、ラテン語の対格MEと与格MIが区別を失うものの、両方の形式が残る、いわゆる自由変異が見られる。古オック語はこれに当たる言語体系である。なお、文法的な意味・機能においては「自由変異」といえるが、こうした場合、社会言語学的な規則性のある変異 (rule-governed variation) が存在することがたびたびある。例えば、フォーマルな場面では(両方の意味を表すのに) *me* を使うが、場面がインフォーマルになればなるほど、*mi* が使われる傾向が強まる。あるいは、女性が(両方の意味で) *me* を使うのに対し、*mi* の使用は男性に多い、などの場合も考えられるのである。ここで自由変異があったとされる言語体系(古オック語)はすでに死語となっているため、こうした綿密な社会言語学的な調査が不可能である点で議論の余地を残している。もし、古オック語がまだ日常的に使われている言語で、何らかの使い分けが見られるならば、タイプCとしての分類が不可能になるということも否定できないであろう。

タイプCというのは基本的には変化途中の言語体系であり、安定している言

語体系ではないという可能性も考えなければならない。やはり、ここで挙がっている古オック語は、文献上は存在するものの、一時的な言語体系だからこそ現在は見られないのではないかという疑いが残る。

タイプ C (自由変異。区別が失われるが、機能しないゴミとして語形が残ってしまう)

ラテン語 ME > me, mi 古オック語 (Old Occitan, 図 1 参照)
 対格 ME > me, mi 対格・与格の離接代名詞・接続代名詞
 与格 MIHI > MI

タイプ D の二つは、「ことばのリサイクル」といった類である。D では、片方の語形が消失してしまう B と同様、これまで担っていた意味がなくなり、かつての文法的区別が失われているものの、B と異なり語形自体は廃っていない。例えば D 1 に分類されるスペイン語、フランス北部の諸方言、そしてイタリア語のほとんどの方言では、対格と与格の区別がなくなり、両方を表す語形として me が採用されている。一方、不要になった mi は、これまでのラテン語にはなかった文法的区別を表すのに役立つ。すなわち、 mi が離接代名詞に変身した結果、 me は (対格・与格両方の) 接続代名詞として使われるという現象である。

タイプ D 1 (再利用。語形が残されるが、別の機能を果たすものとして語形が残される。)

ラテン語 ME > me スペイン語、フランス北部の諸方言、イタリア語のほとんどの方言
 対格 ME > me 対格・与格の接続代名詞
 与格 MIHI > MI > mi 離接代名詞 (前置詞句に出てくる)

タイプ D 2 は、D 1 と基本的に同じような現象であるが、いずれも me に収斂し、 mi はこれまでと違う意味・機能をもつものとして再利用

(refunctionalize) される D 1 対し、D 2 は逆に、*mi*がかつての二つの意味・機能を担い、*me*がこれまでと違うものに変身するタイプである。

タイプ D 2 (再利用。語形が残されるが、別の機能を果たすものとして語形が残される。)

ラテン語 (トスカナ方言はこれに見えるが、実は B 1 である)

対格 ME > *me* 離接代名詞

与格 MIHI > MI > *mi* 対格・与格の接続代名詞

イタリア中部で話されているトスカナ方言 (Tuscan, ちなみにこれは標準イタリア語として採用されている方言でもある) はこの D 2 に当てはまるように見える。しかし、実はそうではない。トスカナ方言の *mi* は、ラテン語の ME に由来する単語なのである。すなわち、トスカナ方言では、音韻的变化が生じた結果 ME が *mi* になったと考えられている。このような変化が生じたことは、ラテン語の前置詞 DE がトスカナ方言では *di* になっていることから明らかである。音韻变化の規則に従って変化した「*me* > *mi*」がそのまま対格・与格として使われ (続け) て、例外的に古い発音を残した *me* が新しい役割を果たすようになったのである。

ラテン語からイタリア語への音韻変化

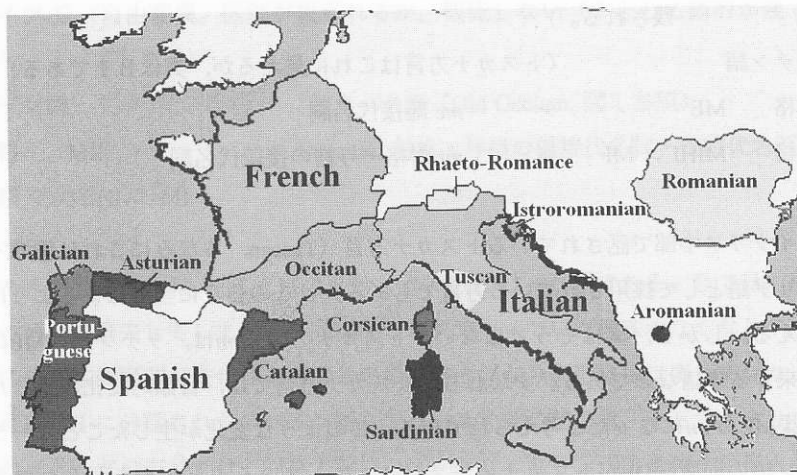
後期ラテン語	トスカナ方言	標準伊語	フランス語	英訳
[me'nakja]	[mi'nattʃa]	[mə'nas]		脅威
[de'nokte]de nocte	[di'notte]di notte	[dø'nui]de nuit		夜に
[me'tropat]me tropat	[mi'trova]mi trova	[mə'truv]me trouve		私を見つける

トスカナ方言は、一見 D 2 にみえるが、実際は B 1 に分類される方言なのである。実は、D 2 として考えられるのはトスカナ方言のみであったので、トスカナ方言がこの候補から外れると、D 2 は、先ほどの B 2 と同様、空白の分類ということになる。すなわち D 2 は、理論的にはあり得るはずの分類である

が、実際には見当たらないというものである。

以上、ラテン語がヨーロッパ各地で様々な形で起こした変化を類型化した Smith 2002のタイポロジーを紹介した。

図 1. ロマンズ語族の分布



3. 補足説明

第2節で取り上げた主格と対格は一般に知られている文法カテゴリーであるが、接続代名詞・離接代名詞の区別は、ここで改めて説明する必要がある。

英語は「主格・対格」の区別を持つ言語であると思われるが、現代英語の実態を考えると、むしろ「接続代名詞・離接代名詞」の区別をもつ言語であると捉えた方が合っている。

例を考えよう。「この中でスペイン語を話す人はどなたですか？手を上げてください」という問いに対し、英語では、手を上げながら“Me.”と答えなければならない。ここで“I.”と答えたとする、いわゆる主格ではあるにも関わらず、それは文法的におかしいとされる。ところが、同じ質問に対して、“I do.”とか“Me. I speak Spanish.”と返答することはまったく問題がなく、文法的に正しい用法とされる。

他の構文にも同様の現象がみられる。英語では、“Tom and I went to the store.”と言えるが、“I and Tom went to the store.”は非文になる。後者が非文になる理由について、母語教育（Englishの時間）の学校文法では「礼儀」を用いて説明している。つまり、「自分のことを考える前に、相手の考えてあげるべきだ」と教えられるのであるが、これはナンセンスというか、後で考えられる理屈であり、本当の原因ではない。というのも、口語では“Me and Tom went to the store.”というのはまったく問題ないからである。

このような現象は、フランス語にもみられる。“Qui ici parle français?”（この中でフランス語を話す人はいますか？）に対しては“Je parle français”（私はフランス語を話せる）と言える。主語だから“je”を使うのは当たり前だと思う。ところで、同じ質問に対して、動詞なしで、「私！」だけと答える場合は、“je”が使えない。この場合は“Moi”としか言えない。なぜなら、動詞が続いていないからである。フランス語で *me* は対格（接続代名詞）と与格（接続代名詞）の両方で使われるようになっている。ラテン語のMEを失っている。（*moi*もあるが、これは「離接代名詞」なのである。）フランス語では、*je*の後ろに動詞がなければならないので、*je*はcliticと言う概念に匹敵する。clitic単独語では使えないことばと定義できる。一方、*moi*は（動詞がすぐうしろに来なくても良いので）単独語と言える。

英語やフランス語の文法解釈では、「主格」や「対格」という用語が使われているが、実はこの用語がそれぞれの文法体系を正確に表わしているものではない。英語やフランス語のような言語では、主語か目的語かという基準ではなく、代名詞の直後に動詞が来るか否かが決め手となる。したがって、単独の場合（“Me. I speak Spanish.”）でも、代名詞の後ろに動詞以外のものが来る場合（“Me and Tom went to the store.”）でも、“I”ではなく、“me”が使われる。英語の代名詞において、ラテン語やスペイン語で使われている「主格・対格」という概念は、無意味なものであるといえる。

スペイン語*me*は対格（接続代名詞）と与格（接続代名詞）の両方で使われるようになった。そして*mi*に前置詞句代名詞という新しい役割を与えた。

「主格・対格体系」と「接続代名詞・離接代名詞体系」との違い

	ラテン語	Français (接続・離接)	Español (主格・対格)	English (接続・離接)
対格 (接続代名詞) accusative	me	Elle va me frapper.	Ella va a golpear me .	She is going to hit me .
与格 (接続代名詞) dative	mihi	À qui a-t-elle donné le présent? À moi. Elle me l'a donné.	Quién ella dio el presente? Ella me dio el presente.	To whom did she give the present? Me . She gave me the present.
前置詞の後 (離接代名詞)	me	Pensez à moi souvent.	Piense en mí a menudo.	Think of me often.
主格 (離接代名詞) disjunctive pronoun	ego	Qui ici parle français? Moi .	?Quién aquí habla español? Yo .	Who here speaks Spanish? Me .
主格 (接続代名詞) conjunctive pronoun	ego	Qui ici parle français? Je parle français.	?Quién aquí habla español? (Yo) Hablo español.	Who here speaks Spanish? I speak Spanish.

以上、スミスの理論の補足説明として、ヨーロッパのいくつかの言語における代名詞の格の実態やその分類を考察した。

4. オーストロネシア祖語

ここで再びスミスの類型に戻る (Smith 2002)。今度は氏が挙げるオーストロネシア語族の例を見てみよう。現在のオーストロネシア地域で話されている色々な言語変種は元々オーストロネシア祖語と呼ばれる言語から発展したと考えられている。ラテン語と同様「子供言語を生んでから死んだ」この言語は、現在使われていないが、比較言語学で信頼性の高い科学的な手法として認められている「再構築」(reconstruction)によって再現されている。そのオーストロネシア祖語では、1人称代名詞の複数形には二種類の区別があったとされる。すなわち、包括的複数形(「私とあなた」という意味の「私たち」と除外的複数形(「あなたを含まない私と第三者」という意味の「私たち」)の2形式である。前者をikita、後者をikamiと言っていた。

現在の標準マレー語ではこの区別が保たれ、古いオーストロネシア祖語の形が残されている。これはロマンス諸語におけるタイプAに匹敵する。ジャカルタ方言(図2の1番)ではこの区別が失われ、ikitaから変化したkiteが両方の

図 2. マレー語変種の分布



意味・機能を担っている。これは上で見たタイプ B 1 に相当する。

なお、D 1 にあたる言語体系がオーストロネシア語族の言語にも存在する。Tukang Besi 方言では、包括的複数形と除外的複数形の区別がなくなり、ikita が複数形を示す形式として残っている。一方、ikami が表すのは、同じ複数形でも 3 人から 6 人ぐらいを表す「少数形」(paucal) であり、非常に特殊な意味・機能に変身しているといえる。

タイプ A'

オーストロネシア祖語

現代標準マレー語

1 人称複数形 包括的 *i-[k]ita > kita 1 人称複数形 包括的

1 人称複数形 除外的 *i-[k]ami > kami 1 人称複数形 除外的

※ なお、kami という意味の除外的複数形の意味でも、丁寧語に言う場合に kita が使われる。

タイプ B 1'

オーストロネシア祖語		タウイ語 (ジャカルタマレー語) ⁵
1人称複数形 包括的	*i-[k]jita	> kite 1人称複数形
1人称複数形 除外的	*i-[k]jami	> ---

タイプ D 1'

オーストロネシア祖語		トゥカン・ベシ語(Tukang Besi)
1人称複数形 包括的	*i-[k]jita	> ikita 1人称多数形 (plural, 6以上の数)
1人称複数形 除外的	*i-[k]jami	> ikami 1人称少数形(paucal, 3~6程度)

気になるのは、ラテン語の分類で見たように、タイプAとB1, そしてD1が見られるのに、B2とD2は見られない。そして、変化の途中で、不安なためかタイプCに匹敵する言語体系も見当たらない。以上、スミス(2002)のオーストロネシアの例を(補足説明をしながら)紹介した。

5. 西日本諸方言への応用 — タイプの提示

これまで、スミスの提唱する言語変化タイポロジーについて概観してきた。では、この言語変化タイポロジーは日本語の場合にも適応できるのだろうか?本節では、日本語諸方言におけるバリエーションのうち西日本で広く使われているアスペクト表現を取り上げ、スミスの言語変化タイポロジーが日本語諸方言にみられるバリエーションを言語変化の観点から説明するのに有効であるかどうか検討してみたい。

5 ベタウィ語Betawi (ジャカルタマレー語Jakarta Malayとも呼ばれる)はマレー基盤のクレオール言語。標準インドネシア語とも、他のマレー基盤のビジンやクレオール言語とも顕著に異なる。19世紀なかばに発展したのではないかと考えられる。その特徴は音素、形態、語彙のそれぞれの側面に現れている。バリ語やPeranakan Chineseからの影響も見られる。インドネシア語話者は理解できない。ダイグロシアではL変種になるが、上流階級が使う威信変種と感じられる場合もある。(Gordon 2005).

西日本の多くの方言には、アスペクト形式として、動詞連用形+～オルを出自とし、進行態を表す～ヨルと、動詞テ形+～オルを出自とし、結果態を表す～トルがある⁶。しかし、これらの方言では、～トルが～ヨルの表す進行態としても機能するようになり、共通語の～テル（～テイル）と同様、進行態、結果態を区別しない方向で変化が進んでいる。そして、～トルへの統合速度が各方言で異なっていることを反映したのか、諸方言にはさまざまなバリエーションがみられる（工藤（研究代表）（2001）他）。また、同じ西日本でも京阪を中心とする地域の～ヨルは、アスペクト形式ではなく、下向きの待遇を表す卑語形式として機能していることが知られている（井上1998）。

このように、西日本諸方言は、～ヨルの不使用化および～トルによるアスペクト形式の統合という言語変化によって複雑な状況を呈している。そこで以下では、～ヨル、～トルをめぐる西日本諸方言のバリエーションをスミスの類型に沿って分類することを試みる⁷。

まず、タイプAは、異なる二つの言語形式が文法的意味・機能を保持している分類である。西日本諸方言の場合、～ヨルが進行態、～トルが結果態として使い分けられている地域がこれに相当する。図3は、『方言文法全国地図』（Grammar Atlas of Japanese Dialects：以下、「GAJ」と呼ぶ）の第198図、第199図をもとに、～ヨルが進行態を、～トルが結果態を表す地域に影を付けたものである。図3をみると、～ヨル、～トルがかつての文法的意味・機能を保持す

6 ～ヨルの音声の変異には、～オル、～ヨウ、～ヨー、～ユー、～ヨル、～ヨール、～ヨウ、～ユーなどが、～トルの音声の変異には、～テオル、～トウ、～トー、～チョル、～チョウ、～チョー、～チューなどがある（高橋1996）。本稿では、これらもまとめて「～ヨル」或いは「～トル」と呼ぶことにする。

7 工藤真由美氏を中心とするアスペクト研究では、文法化の観点から日本諸方言におけるアスペクト体系の類型化が試みられている（工藤1998・2001a b, 工藤（研究代表）2000・2001他）。本稿では、これらの研究とは違い、「言語変化現象には通言語的な類型化が可能か」という点に注目し、～ヨル・～トルをめぐるバリエーションを捉え直してみたい。

次に、タイプ B 1 と B 2 は、片方の形式が消失し、残った語形が両方の文法的意味・機能を担うようになるパターンである。西日本諸方言に当てはめると、～ヨルが消失し、かつて結果態のみを表していた～トルが進行態の意味も表せるようになっている地域ということになる。図 4 は、進行態、結果態の両方で～トルが使用されている地域に影を付けたものである（GAJ第198図、第199図をもとに作成）。図 4 からは、進行態、結果態の両方に～トルを使用するのは、鹿児島県、島根県、中部地方、北陸地方の一部等であることがわかる。

一方、進行態、結果態が～ヨルに統一される変化パターンである B 2 も理論的には想定できるはずだが、これにあたる方言変種は報告されていない。

タイプ B 1”（地域：図 4 参照）

西日本	愛知県名古屋市など
～トル 結果態	～トル 結果態と進行態 (resultative/progressive)
～ヨル 進行態	---

タイプ B 2”（報告されていない）

～トル 結果態	---
～ヨル 進行態	～ヨル 結果態と進行態 (resultative/progressive)

タイプ C は、～ヨル、～トルともに進行態、結果態の両方の意味で使用される分類である。このような方言は今のところ報告されていない。

タイプ C”（報告されていない）

～トル 結果態	～トル 結果態と進行態 (resultative/progressive)
～ヨル 進行態	～ヨル 結果態と進行態 (resultative/progressive)

タイプ D 1 は、一方の形式が文法的意味・機能を統合し、もう一方の形式は別の文法的意味・機能を担う形式として再利用されるという分類である。西日

本諸方言に当てはめると、進行態、結果態ともに～トルによって統合され、不要になった～ヨルが別の意味・機能を担っているものである。大阪市など関西中央部の諸方言がこれに相当し、この地域の～ヨルは、これまでになかった卑語（下向きの待遇）を表す形式として使用されている⁹。図5は、卑語形式としての～ヨルの分布域に影をつけたものである（井上（1998：158）の図1をもとに作成）。

図5 トル（進行態／結果態）ヨル（待遇表現）（井上1998：158，図1をもとに作成）



タイプD1”（地域：図5参照）

西日本

大阪府、滋賀県などの関西中央部

9 関西中央部では、アスペクト形式として、～トルとともに～テル（～テイル）も使用される。～トルは、待遇的に中立な～テルと比べ、軽卑的な意味を伴っている（井上1998）。しかし、～トルには、卑語の～ヨルにみられるような人称制限がなく、進行態・結果態というアスペクト的な意味・機能を保持しているため、本稿ではこの地域の方言をD1に分類した。

～トル	結果態	～トル	結果態と進行態 (resultative/progressive)
～ヨル	進行態	～ヨル	別の文法的意味・機能 (単語・下向きの待遇表現)

タイプD2は、D1とは逆に、～ヨルが進行態、結果態の意味を担い、～トルがこれまでとは異なる文法的意味・機能を果たすようになる分類であるが、このような方言は现阶段では報告されていない。

タイプD2”

西日本	(報告されていない)		
～トル	結果態	～トル	別の文法的意味・機能
～ヨル	進行態	～ヨル	結果態と進行態 (resultative/progressive)

以上、スミスの言語変化タイポロジーが日本諸方言についても適応できるかどうかを確認するために、～ヨル、～トルの使用状況に合わせて西日本の諸方言を分類してみた。その結果、西日本諸方言にみられるバリエーションの類型がスミスの例示したロマンス諸語、オーストロネシア語族における言語変化の類型と類似することがわかった。すなわち、西日本諸方言の～ヨル、～トルをめぐって確認されたのは、タイプA、B1、D1の3類型のみであり、タイプB2、C、D2は、理論的には可能だが実際には見当たらない類型であったのである。このことから、言語変化現象は、言語、そして文法的範疇を超えた類似性があり、大局的にみれば、それを類型化することが可能であるといえる。

6. いくつかの問題

第5節では、西日本の諸方言における～ヨル、～トルの使用を、通言語的な言語変化タイポロジーに沿って分類することが可能であることを明らかにした。しかしながら、西日本諸方言における～ヨル、～トルをめぐる状況は、タイプA、B1、D2の3類型に分類されるほど単純なものではなく、いくつかの問

題が生じることも事実である。そこで、以下では、スミスの類型では解決しきれない問題のうち、特に、進行態としてではなく別の意味・機能として使用される～ヨルに注目して考察していくことにする。

6.1 タイプB1における限定的な～ヨッタの使用

～ヨルが消失し、～トルが進行態・結果態の両方を担うタイプB1の中には、本来～ヨルのもつ意味・機能の一部であったはずの回想や将然を表すために、～ヨッタを限定的に使用する方言がある(井上1998)。

図6・図7は、回想を表す～ヨッタの分布域に影をつけたものである(GAJ第188図, 第198図, 第199図をもとに作成)。回想の～ヨッタが分布する全地域を示したのが図6であり、さらにそこから、タイプB1に当たる地域のみを抜き出したのが図7である。図6・図7により、回想の～ヨッタは、長崎県、山口県西部、広島県東部など進行態に～ヨルを使用するタイプAの方言だけでなく、進行態に～ヨルを使用しない鳥取県、愛知県といったタイプB1の方言でも用いられていることがわかる¹⁰。興味深いのは、愛知県には、「イクヨッタ」、「イクオッタ」のように、～ヨッタが終止形に接続した回答が分布している点である。このような接続は、連用形に接続する本来の～ヨルとは異なるものである。さらに、愛知県・三重県では、～ヨッタが形容詞に接続する例も報告されている(井上1998)¹¹。

(例1)・愛知県西春日井郡師勝町大字高田寺(愛知県教育委員会1985)

ナカリヨッタ ((昔は) 無かった)

エラカリヨッタ (大変だった)

10 回想の～ヨッタは、GAJをみると島根県出雲地方、愛知県東部、静岡県西部には分布していないが、これらの地域の談話資料には用例が確認されている(井上1998)。

11 ～ヨルが進行態、～トルが結果態として機能するタイプAの方言にも、～ヨッタが形容詞に接続する例が報告されている。以下は、熊本県下益城郡松橋町の例である(村上2004)。この方言では、(2)のように現在テンスの例もある。

(1) センゲツマデワ マイニチ サムカリヨッタ (先月までは毎日寒かった)

(2) コノゴロワ マイニチ サンカリヨル (この頃は毎日寒い) (村上2004: 199より引用)

ヨカリヨッタ, エーカリヨッタ

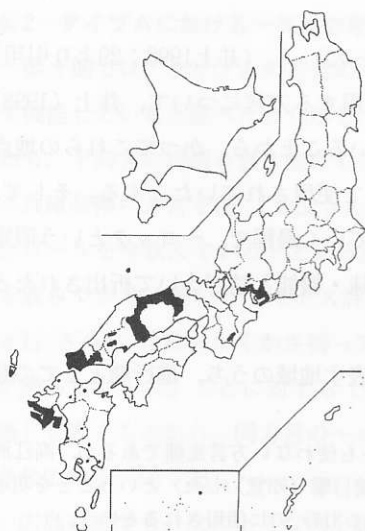
- ・三重県中勢 (佐藤虎男1982)

ナサケナカリヨッタ

(井上1998: 25-26より引用)

図6 回想～ヨッタの使用地域

図7 B1地域における回想～ヨッタの使用



(GAJ第188図をもとに作成)



(GAJ第188図, 第198図, 第199図をもとに作成)

このように、この地域における回想の～ヨッタは、本来の～ヨルとは接続が異なり、また形容詞に接続するなど動詞の文法的範疇をも超えていることから、～ヨルから独立した形式として残存しているといえる¹²。

次に、タイプB1の中で、～ヨッタを、将然、特に、未然過去として使用する方言について見ていこう。タイプB1に属する愛知県・静岡県では、「もう少しで～するところだった」という未然過去を表すのに～オッタが使用されている。しかも、以下の例では、～オッタが終止形に接続している。先に示した

12 井上(1998)にも同様の指摘がある。

ように、愛知県の方言には、回想の～ヨッタにも終止形への接続例があるが、単なる偶然とは考えにくい。

(例2)・静岡県浜名郡新居町(山口幸洋1985)

落チルオッタ ((あぶなく) 崖から落ちるところだった)

降ラレルオッタ ((もう少し島にいたら) 雨に降られるところだった)

・愛知県東部(真田信治1981)

雨ガ降ルオッタ (降るところだった) (井上1998: 29より引用)

回想や将然として限定的に～ヨッタを使用する方言について、井上(1998)は、進行態の～ヨルをもつ方言が隣接していることから、かつてこれらの地点でも～ヨルが進行態のアスペクト形式として使用されていたとする。そして、～トルによる統合が進み、～ヨルが消滅していく過程で、～ヨッタという限定された形式が回想や将然という残存した意味・機能と結びついて析出されたと推定している¹³。

以上、～トルが進行態・結果態の両方を表す地域のうち、進行態としての意

13 ウチナーヤマトグチは、～ヨルも～トルも使わない方言変種であるが、高江洲(2004)によれば、～ヨッタが「〈話し手が直接目撃(知覚)した〉ということを示す認識的なムードをあらわす」(高江洲2004: 317)のに使用されるという。

(1) カゼガ フイテ ローソクガ キエヨッタ。(風が吹いてローソクが消えた。〈目撃: 見た〉) (同: 318)

そして、上のような「証拠性 (evidentiality)」に関わる～ヨッタには、1人称を主語にできないという人称制限があることも指摘されている(同)。

また、ウチナーヤマトグチの～ヨッタは、一方で、「話し手が過去においてくりかえし〈知覚〉した動作・変化」を表す「反復習慣」(同: 320)と、「動作・変化が成立する直前までいったが、成立しなかったこと」を表す「非実現」(同: 321)としても機能しているという。

(2) ウチワ アノコロ ロクジニ マド アケヨッタ。(私はあの頃6時に窓を開けていた。) (同: 320-321)

(3) キンギョガ ヤガテ シニヨッタ。(金魚がもう少しで死ぬところだった。)(同: 322)

「反復習慣」「非実現」として機能する～ヨッタには、人称制限がなく、意味的にも回想、未然過去(将然)と近似していることから、本土の～ヨッタとどのような関係にあるのが今後注目されるところである。

味・機能を失った～ヨッタが回想や将然という限定された意味・機能で使用されている島根、鳥取、愛知等の方言についてみてきた。これらの方言は、そのような～ヨッタの使用がない方言（例えば鹿児島県）の存在を考え合わせると、タイプAとタイプB1の中間に位置づけるのが妥当であるように思われる。

6.2 タイプAにおける～ヨルの卑語的な使用

第5節では、タイプAの方言の～ヨルは、進行態を表すアスペクト形式として機能していると述べた。しかし、タイプAの中にも、～ヨルを、卑語、すなわち、下向きの待遇を表す際にも使用する方言がある。

兵庫県神戸方言では、「お父さんがビール飲みよる」という場合、「お父さんがビールを今飲んでいる」という進行態を表すと同時に、「お父さんがビールを飲みやがる」というマイナス評価も表すことが報告されている（工藤2001a）。さらに、「せっかくかさ持っていったのに、雨降りよらんかった」が「雨が降らなかった」ことに対する「発話時における話し手のマイナスの感情評価」を表すことから、同方言の～ヨルが待遇表現としても機能することが指摘されている（同：26）。

広島方言でも、次のような例が観察されている（工藤1998）。

（例2）・広島方言

「いらんことしょってからに」（余計な事をしやがって）

「ぶつきよった」（ぶつけやがった）

（工藤1998：10より引用）

このように、神戸方言や広島方言の～ヨルは、進行態を表すアスペクト形式でありながら、卑語の意味を併せもつ場合がある。井上（1998）には以下のような興味深い考察がある。

神戸市東灘区、兵庫県多紀郡篠山町などの若年層では、関西中央部で独自に待遇化した～ヨルを受け入れつつあることが認められる。ただし、これはアコモデーション的な使用の要素も含んでのことである。いずれにしても、この地域は一中略～ヨルの卑語化地域との境界に

あたるわけである。つまり、～ヨル・～トルで進行態・結果態を言い分けていたのが、～ヨルが消え、～トルで統合したことによって、〈オル〉系統の体系の空き間に卑語の～ヨルが入ってきているのだとすることができる。(井上1998:157より引用)

つまり、神戸市等では、進行態としての～ヨルが消失しつつあり、また関西中央部の人々との頻繁な接触があるために、卑語的な色彩を帯びた～ヨルが使用されるというのである。一方の広島市は、関西中央部とは地理的に連続してはいない。しかし、関西中央部の方言が西日本において潜在的権威 (covert prestige) をもつと考えれば、広島方言でもアコモデーション的に卑語の～ヨルが使用された可能性が高いように思われる。ただし、広島方言の話者が「それ程頻繁には使用されない」と留保するように、卑語的な～ヨルの使用頻度はあまり高くない。したがって、これらの方言はあくまでもタイプAのバリエーションの一つであり、タイプD1との中間に位置する別パターンとして取り上げる必要はないと考える。

6.3 タイプCは一時的な現象か

西日本諸方言における～ヨル・～トルには、タイプCはみられず、一時的な現象かどうかさえ、検証できない。

7. 2つの形式のうち、どちらが消えるか

以上、スミスのタイプロジーを応用して、西日本におけるアスペクト表現の変化をこれまでの日本語研究とは違う観点から考察した。残された最大の問題点は、残存形と消滅形を決定する要因とは何か、ということである。すなわち、2つの形式が競合し、片方が残り意味・機能領域を拡大する、そして片方が別の文法的意味・機能を果たすものに生まれ変わる(または消えてしまう)ときに、それぞれの運命を決定する要因とは何か。それは社会言語学的な特徴なのか、言語内的特徴なのか、それとも予測不可能で恣意的な問題なのか、今のところ答えが出せない。

ラテン語の場合、対格のMEが与格のMIよりも使用頻度が高いと言われている。また、現代標準マレー語の場合、包括的なkitaが、除外的なkamiよりも使用頻度が高いことも指摘されている。ここから、使用頻度の高い形式が低い形式を統合するという仮説がたてられるが、これら二つの例について、使用頻度の差異を判断するデータ自体が不足しており、また、仮にそれが事実だとしても、対格と与格、包括形と除外形というように、異なる意味・機能をもつ二つの形式を比較して議論すること自体に無理がある。ラテン語やマレー語の場合はさておき、西日本の～ヨル・～トルについて考えると、自然談話資料をみる限りでは、消滅形の～ヨルの頻度が残存形の～トルよりも低いとは一概に言えない(二階堂2004¹⁴)。つまり、西日本の例では、残存形と消滅形を決定する要因として使用頻度を第一に挙げることはできないのである。

では、西日本諸方言のアスペクト表現の運命(残るか消えるか)を決める要因とは何か。ここで、言語の違いを越えたタイポロジーによって多数の言語の変化を説明する要因を見つける作業は今後の課題として保留し、西日本のアスペクト形式の例について再検討しよう。

日本語史上、進行態の～ヨルが消え、～トルが進行態・結果態を統合する変化は、内的変化であるとされる(井上1998)。また、この変化は、～トルが形態・統語面において共通語の～テルを意識することにより推進されたと言われている(真田1991¹⁵、井上1998)。すなわち、形態論的な面では、～ヨルと比

14 二階堂(2004)は、福岡の自然談話資料に現れた～ヨル・～トルについて考察し、工藤氏らによって示された理論上の枠組みが実例にも有効かどうかを検証した。その説とは、(1)進行態を表す～トルは、話し手が直接目撃しているという文脈の支えがある場合ほど多く使用される(工藤(研究代表)2001)、(2)～トルの使用は、「主体動作動詞」→「主体動作客体変化動詞」→「主体変化動詞」の順に進む(工藤1998)の2つである。福岡における検証の結果、(1)文脈の支えがある場合ほど～ヨルが積極的に選択されること、(2)「主体動作動詞」に接続する場合も～ヨルの頻度が高いことがわかり、自然談話では依然として～ヨルも頻繁に使用されていることが示された。

15 真田(1991)は、進行態と結果態を形式上区別しない共通語の～テルを意識しての対応変換であり、～トルは、潜在的権威をもって西日本諸方言で迎え入れられていると述べている。

較した場合、～トルという形態素そのものが～テルに近く、統語論的な面からも、～トルの接続語幹（書いトル）が、～ヨル（書きヨル）に比べ、～テル（書いテル）に近いのである。ここで注意したいのは、～ヨルが、共通語の～テルでは表せない将然（未然過去）という意味・機能を併せ持つ点である（日高2002）。常識的に考えれば、～テルが進行態・結果態を～トルが統合する変化に潜在的権威として働いたとしても、～テルでは対応できない将然を表すには～ヨルが必要であり、そのことが～ヨルを消失しにくくする要因となるはずである（～ヨッタという形態に限定されることはあるにせよ）。しかし現実には、6. 1で触れた一部の地域にしか将然の～ヨルは残存しておらず、最終的には進行態の～ヨルの消失とともに将然の～ヨルも消失してしまう。なぜこのようなことが起きるのか疑問はつきないが、上で述べたことを考え合わせると、～トルによる統合という変化は、日本語個別の事情によるものだということになる。

参考文献

- 井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』秋山書店
- 金水敏（1983）「上代・中古のキルとヨリ—状態化形式の推移—」『国語学』134
- 工藤真由美（1998）「西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐる—中間報告と今後の課題—」『日本語研究』18 東京都立大学国語学研究室
- 工藤真由美（2001a）「調査研究の目的・方法と結果の概要」工藤（研究代表）所収
- 工藤真由美（2001b）「アスペクト体系の生成と進化—西日本諸方言を中心に—」言語学研究会（編）『ことばの科学10』むぎ書房
- 工藤真由美（研究代表）（2000）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究—西日本編—』文部省科学研究費成果報告書
- 工藤真由美（研究代表）（2001）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書
- 工藤真由美（編）（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』ひつじ書房
- 久野マリ子（2001）「兵庫県播州方言におけるアスペクト表現の地域差と年代差」工藤

(研究代表) 所収

国立国語研究所 (1999) 『方言文法全国地図 第4集』大蔵省印刷局

真田信治 (1991) 「社会言語学から見た言語変化」『日本語学』10-4 明治書院

高江洲頼子 (2004) 「ウチナーヤマトゥグチー動詞のアスペクト・テンス・ムード」工

藤 (編) 所収

高橋顕志 (1996) 『地域語の生態シリーズ 地域差から年齢差へ, そして……—中・四国』
おうふう

坪井美樹 (2005) 「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』82-11 東京大学国語国文学会

二階堂整 (2004) 「福岡のアスペクト—談話資料から—」『日本方言研究会 第78回研究
発表会発表原稿集』(於) 実践女子大学

日高水穂 (2002) 「方言の文法」江端義夫 (編) 『朝倉日本語講座10 方言』朝倉書店

村上智美 (2004) 「形容詞に接続するヨル形式について—熊本県下益城郡松橋町の場合
—」工藤 (編) 所収

柳田征司 (1990) 「近代語の進行態・已然態表現」近代語学会編『近代語研究』8 武
蔵野書院

Dickey, Mike (1994) “Summary: question-answering” という言語学者が1994年8月
10日にメーリングリストに載せたポストィングを参考にした。Linguist
List : Vol-5-883.

Gordon, Raymond G., Jr. (ed.), 2005. *Ethnologue : Languages of the World*, Fifteenth
edition. Dallas, Tex. : SIL International. Online version:
<http://www.ethnologue.com/>.

Smith, John Charles (2002) Refunctionalization vs. Adfunctionalization and Merger
vs. Near-Merger : Missing Distinctions in the ‘Science of Form’. Paper read at the
Oxford-Kobe Seminar on Language Change and Historical Linguistics,
April 2002.

本稿は2002年7月20日, 第98回変異理論研究会で発表されたものを加筆した
ものである。参加してコメントをしてくださった方々への感謝の意を表明しま
す。